

「マクベス」に見る不幸の諸相

The Variety of Unhappiness in *Macbeth*松田 理
Osamu Matsuda

「マクベス」はシェイクスピアの代表的悲劇のひとつと考えられているが、それは人間の不幸が明確な主題となっていることが誰の目にも明らかだからである。この小論ではシェイクスピアが不幸と考えるものを分析し、不幸について彼がどのような認識を持っていたかを知る手がかりとした。まず、作品全体に散りばめられた不幸を拾い集め、それぞれの不幸の性質及びそれがいかなるタイプの不幸に属するかを考えることから始めた。

第一の不幸はコーダーの領主の不幸である。作品冒頭に描かれるスコットランドの内乱は彼が首謀者となって引き起こされたものである。内乱勃発の経緯については触れられていないが、高潔なダンカン王に反旗を翻した点から見て、コーダーの領主の私利私欲がその原動力であると観客とシェイクスピアとの間で暗黙の了解が成立している。ダンカン王のもとでは野望を遂げられぬと悟った男が、政権の転覆を謀ったと考えるのが妥当である。政権転覆は極めて危険な賭けであるにもかかわらず、敢えてそれを企てるということは、それ以前に既に彼は耐え難い不幸な状態に置かれていた事を意味する。その不幸から逃れるために、即ち幸福になるために彼は危険な賭を実行に移し、その結果戦に敗れて命を含む全ての物を失うことになる。彼は不幸から逃れるために新たなる不幸を招来したわけである。彼の不幸は因果関係を持って連続しており、このような不幸を、不幸が招く不幸と呼ぶことにする。

第二の不幸はダンカン王の不幸である。彼の不

幸はマクベスによってもたらされる。即ち、彼はマクベスに暗殺される。ダンカン自身は温厚高潔で非のうちどころのない国王であり、国民の信頼も篤い。

Macb. Besides, this Duncan
Hath borne his faculties so meek, hath been
So clear in his great office, that his virtues
Will plead like angels, trumpet-tongu'd, against
The deep damnation of his taking-off; . . .

(1幕7場)

ダンカンの場合、不幸を招来するような危険を冒す必要が全くない。しかし不幸は彼に降りかかった。その責任も原因もほとんどマクベスの側にあるのだが、敢えてダンカンの側に原因を求めるならば、それは彼の不注意ということになるだろう。コーダーの領主を首謀者とする内乱が現実が発生するという状況にありながら、あまりにもたやすく他人を信用する彼の善良さが命取りになったのである。手厳しく言えば、一国の王としては人間の心理に対する洞察力に欠けていたとも言える。

Dun. There's no art
To find the mind's construction in the face:
He was a gentleman on whom I built
An absolute trust -

(1幕4場)

劇を観る者の立場としては、ダンカンの善良さをまず讃えたいと思うのが人情で、それゆえにマクベスの私利私欲に対する怒りも高まるわけである

「マクベス」に見る不幸の諸相

が、実際に一国の平和を真剣に考えるならばダンカンには少なからず不注意である。しかし、この不注意も疑うことを知らぬ性質も、結局は彼の濃厚高潔な性質と表裏一体である。したがって、彼のような不幸を人間の長所に潜在する不幸と呼ぶことにする。

第三の不幸はバンクォーの不幸である。彼の不幸もまたマクベスによってもたらされる。彼はマクベスが放った刺客によって暗殺される。マクベスと共に戦い内乱を鎮圧したバンクォーは国家の英雄として讃えられ、また、子孫が王位に就くことを魔女たちから予言され、いずれにしても極めて幸福な状態にあった。知的で慎重な彼は魔女たちの予言を聞いても動揺することなく、冷静に事態を分析し、人間の尊厳をもって魔女たちと向かい合う。

Ban. Good Sir, why do you start, and seem to fear
Things that do sound so fair? - I'th' name of truth,
Are ye fantasitical, or that indeed
Which outwardly ye show? My noble partner
You greet with present grace, and great prediction
Of noble having, and of royal hope,
That he seems rapt withal: to me you speak not.
If you can look into the seeds of time,
And say which grain will grow, and which will not,
Speak then to me, who neither beg, nor fear,
Your favours nor your hate.

(1幕3場)

Macb. [*Aside.*] Glamis, and Thane of Cawdor:
The greaterst is behind. [*To Rosse and Angus*]
Thanks for your pains. -
[*To Banquo*] Do you not hope your children shall be
kings,
When those that gave the Thane of Cawdor to me
Promis'd no less to them?

Ban. That, trusted home,
Might yet enkindle you unto the crown,
Besides the Thane of Cawdor. But'tis strange:
And oftentimes, to win us to our harm,

The instruments of Darkness tell us truths;
Win us with honest trifles, to betray's
In deepest consequence. -

(1幕3場)

王位に目がくらんでマクベスが国王を暗殺したらしいことにもバンクォーは気づいているが、マクベスの魔手が自分にまで伸びて来ようとは予測できなかった。なぜならば、バンクォーの子孫が王位に就くという予言は必ずしもマクベスの妨げにはならないからである。即ち、マクベスには王位を継ぐべき子供がまだ無いので、彼の王位は子孫に受け継がれないことが充分考えられるからである。論理的に考えれば、バンクォーはマクベスから身を守る必要が全く無い。しかしマクベスの心理はバンクォーの論理を越えていた。バンクォーに対する魔女たちの予言がもたらす疑心暗鬼、バンクォーの人格に対する嫉妬と恐れ。そういったものがマクベスの殺意を掻き立てることになる。

Macb.

To be thus is nothing, but to be safely thus:
Our fears in Banquo
Stick deep, and in his royalty of nature
Reigns that which would be fear'd: 'tis much he
dares;
And, to that dauntless temper of his mind,
He hath a wisdom that doth guide his valour
To act in safety. There is none but he
Whose being I do fear: and under him
My Genius is rebuk'd; as, it is said,
Mark Antony's was by Cæsar. He chid the Sisters,
When first they put the name of King upon me,
And bade them speak to him; then, prophet-like,
They hail'd him father to a line of kings:
Upon my head they plac'd a fruitless crown,
And put a barren scepter in my gripe,
Thence to be wrench'd with an unlineal hand,
No son of mine succeeding.

(3幕1場)

バンクォーの不幸は、彼の豪胆さと論理性ゆえ

に人間の微妙な心理を読み取れなかったことに起因している。いかなる長所も条件次第で短所となるが、バンクォーの場合相手がマクベスだったために長所があだとなり命を落とすことになる。彼の不幸もまた人間の長所に潜在する不幸と言える。

第四の不幸はマクベス夫人の不幸である。彼女の不幸は単純なものではない。最初この作品に登場する時点で、彼女は少なくとも不幸とは言えない。夫はグラームスの領主という地位にあり、武勇をもって知られる将軍である。彼女と夫は夫婦仲も良い。夫は妻思いで、また妻を頼りにしていると言ってもよい。それはマクベスが彼女に宛てた手紙に見られるとおりである。

Lady M. 'They met me in the day of success; and I have learn'd by the perfect'st report, they have more in them than mortal knowledge. When I burn'd in desire to question them further, they made themselves air, into which they vanish'd. Whiles I stood rapt in the wonder of it, came missives from the King, who all-hail'd me, "Thane of Cawdor"; by which title, before, these Weir'd Sisters saluted me, and referr'd me to the coming on of time, with "Hail, King that shalt be!" This have I thought good to deliver thee (my dearest partner of greatness) that thou might'st not lose the dues of rejoicing, by being ignorant of what greatness is promis'd thee. Lay it to thy heart, and farewell.'

(1幕5場)

しかし、夫の野心が目覚めると同時に、彼女は不幸に向かって第一歩を踏み出すことになる。彼女にとっては夫を支えることが人生のすべてである。善悪の判断よりも夫の野心を実現させることのほうが優先する。その愛情はわが子に対する母親の盲目的愛情にも似ている。それはマクベス夫人に子供がないことと無縁ではない。本来は子供に注がれるべき愛情とともに、マクベスは夫人の愛情と期待を一身に背負っているのである。さて、夫の野心は彼女が登場する舞台を設定し、彼女は水を得た魚の如くその舞台に踊り出る。

Lady M.

Hie thee hither,
That I may pour my spitts in thine ear,
And chastise with the valour of my tongue
All that impedes thee from the golden round,
Which fate and metaphysical aid doth seem
To have thee crown'd withal.

(1幕5場)

結局のところ彼女は幸福な生活に飽き、存在の不安を覚えていたと解釈すべきかもしれない。夫を支える自分の姿を再確認するために心を鬼にして無理な支え方を試みたとも言える。夫に国王暗殺を唆すために、即ち夫の野望を成就させるために、彼女は女でも人間でもなくなることを誓う。

Lady M.

Come, you Spirits
That tend on mortal thoughts, unsex me here,
And fill me, from the crown to the toe, top-full
Of direst cruelty! make thick my blood,
Stop up th'access and passage to remorse;
That no compunctious visitings of Nature
Shake my fell purpose, nor keep peace between
Th'effect and it! Come to my woman's breasts,
And take my milk for gall, you murth'ring ministers,
Wherever in your sightless substances
You wait on Nature's mischief! Come, thick Night,
And pall thee in the dunnest smoke of Hell,
That my keen knife see not the wound it makes,
Nor Heaven peep through the blanket of the dark,
To cry, 'Hold, hold!'

(1幕5場)

こうして逡巡するマクベスを叱りつけ、論し、ついに国王を暗殺させるが、彼女の思惑と異なり、夫は罪の意識と不安に苛まれるという生き地獄に落ちてしまう。夫の不幸を目の当りにするとき彼女には空しさと罪の意識だけが残り、それはやがて絶望へと変わる。支える女、強い女を演じてきた彼女であるが、その彼女を支えてくれるものは最早無いのである。ついに彼女は罪の意識に耐え切れず、精神錯乱に陥り、夢遊病状態で歩き回る

ようになる。そして口にしてはならぬことを口走る。

Lady M. Out, damned spot! out, I say! —One; two: why, then 'tis time to do't. —Hell is murky. —Fie, my Lord, fie! a soldier, and afeard? —What need we fear who knows it, when none can call our power to accompt? —Yet who would have thought the old man to have had so much blood in him?

(5幕1場)

夫人の痛ましい精神状態を語るには医師の言葉を借りるのが最も適切である。

Doct. Foul whisp'rings are abroad. Unnatural deeds
Do breed unnatural troubles: infected minds
To their deaf pillows will discharge their secrets.

(5幕1場)

この後夫人は自ら命を絶つことになる。彼女の不幸の原因は二つに限定してよい。一つは、夫に対して献身的であるにもかかわらず、幸福というものについての認識が甘いこと。もう一つは、子供が無いせいで、女としての活躍の舞台が制限されており、鬱積した愛情を夫に向けざるを得ないことである。彼女の場合、後者の原因が大きい。彼女の不幸は、自己のアイデンティティの揺らぎを収束させようとする努力が母性本能の危険な増幅となって現れた点にある。本来長所であるべき母性本能に異常な刺激が加わり、思慮の不足とあいまって不幸を招いたと言える。バンクォーの場合よりもはるかに複雑な要素と過程を伴っているが、これもまた人間の長所に潜在する不幸である。

第五の不幸はマクベスの不幸である。マクベス夫人のところでも述べたとおり、彼は武勇をもって知られる国王の覚えもめでたい将軍である。富、社会的地位、名声いずれをとっても彼は満足すべき立場にある。内乱を鎮圧し、ノルウェーの侵略をくい止める時、マクベスには何ら不満も無ければ心の乱れも無い。国王のために身を捨てて戦う時こそが彼の最も幸福な時なのである。相対的に

は平時よりも戦時のほうが安定度を増す人格と言える。裏を返せば、平時には、不幸と表現される状態には程遠いが安定度は多少落ちる。確かに上を見れば国王という地位があるが、危険を冒してまでそれを手に入れる必要は無いと彼の理性は判断する。また、彼に野心があるとしても、それは野心と呼べぬほどに微弱なものであり、普段は意識の底に埋もれていて、当人でさえほとんど気づいていない。この状態が持続するなら悲劇は起こらぬはずであった。しかしその微弱な野心は魔女たちによって呼び起こされ、やがて意識の表面へと押し上げられることになる。マクベスが戦に勝ったその帰り道、魔女たちは彼をコーダーの領主と呼び、王になられる方とも呼ぶ。この直後彼はコーダーの領主に任ぜられたことを使者の口から聞く。すると、もうひとつの予言めいた呼びかけもにわかには信憑性を帯びてくる。魔女たちはマクベスが戦から日常へと移行する瞬間、即ち、彼の精神が最も無防備となる瞬間を狙ったのである。しかし、魔女たちの企みを前面に出して論じれば、マクベスの不幸は魔女によってもたらされた不幸であるという無意味な結論にたどり着く恐れがある。そもそも魔女というものは人間の不幸を説明するために考え出された存在であるから、その結論に至るのは当然である。それを避けるために、魔女たちの言葉はマクベス自身のつぶやきと解釈したい。「コーダーの領主は間もなく処刑されるが、あの領地をわしが頂くことにならんだろうか。」「そんな調子で出世して、ついにわしが国王になったりして。」戦の後のそんな軽い気持ちのつぶやきが彼の不幸の発端と考えるほうが現実的である。しかし、単なるつぶやきといえども、そのひとつが即座に実現したとなれば、もうひとつのつぶやきにも無関心ではいられない。希望というものに慣れていない彼は、その希望を片時も自分の胸に納めておくことができず、そそくさと手紙をしたため妻に知らせる。胸に納めておいたならば、そして、判断のすべてを自分で下せる状態にあれば、彼は必ず理性を取り戻して国王暗殺を思い止まらずにはない。彼の理性は決して弱くはないから

である。最後の瞬間まで暗殺を思い止まろうとしていることからそれは明らかである。

Macb. We will proceed no further in this business:

He hath honour'd me of late; and I have bought
Golden opinions from all sorts of people,
Which would be worn now in their newest gloss,
Not cast aside so soon.

(1幕7場)

しかし希望を夫と共有した夫人は、夫の野心を実現することに自らの存在意義を見出し、あたかも命を賭けた戦の如く一步も退かず夫を説き伏せてしまう。マクベスは武器をとっての戦には慣れていても、価値観を戦わせることには不慣れである。舌戦においては彼は夫人の敵ではない。ついに彼は国王を暗殺するはめになる。これ以後、彼は坂を転げ落ちるが如く転落の一途をたどる。罪の意識、疑心暗鬼、そしてまた暗殺という悪循環に陥ってしまうのである。そして最後は彼に妻子を殺されたマクダフに討たれて死ぬ。国王暗殺後の彼の不幸は彼自身にも予測できた不幸であった。王を殺せば、その罪はいずれ暴かれ、その殺意は巡り巡って結局自分に向けられることを彼はよく知っていた。

Macb. If it were done, when 'tis done, then 'twere well

It were done quickly; if th'assassination
Could trammel up the consequence, and catch
With his surcease success; that but this blow
Might be the be-all and the end-all—here,
But here, upon this bank and shoal of time,
We'd jump the life to come.—But in these cases,
We Still have judgment here; that we but teach
Bloody instructions, which, being taught, return
To plague th'inventor: this even-handed Justice
Commedns th'ingredience of our poison'd chalice
To our own lisp.

(1幕7場)

それにもかかわらず彼は不幸を選択してしまった。その原因は二つある。一つは、彼のつぶやきの一

方が現実となったことである。しかしそれは決して偶然でも突飛なことでもなくて、かなり高い確率で起こりうることであった。誰にも一度や二度は巡って来る程度の幸運である。もう一つの原因はマクベス夫人の殺人教唆である。これとても夫思いが高じたもので、程度の差こそあれ勝ち気な妻には有りがちな傾向である。マクベスの不幸とは実は意外にも日常的なもので、彼のわずかな心の揺らぎが夫人によって増幅された結果とすることができる。偉大な教育者が凡人の埋もれた能力を引き出して天才を開花させるように、マクベス夫人は夫の価値観の底に埋もれていた矛盾を実体化して、夫を不幸の頂点である絶望へと導いたのである。結論すれば、彼の不幸は人生の伴侶である夫人との組合せの不運という要素が大きい。決して二人の相性が悪いわけではない。夫婦二人が揃えば、互いの多くの弱点を補いあえるはずで、致命的な弱点は表面化しないはずだが、マクベス夫妻の場合まさにその致命的弱点の部分で補完機能が働くどころかそれを増幅してしまったのである。マクベスも夫人も根っからの悪人というわけではない。にもかかわらずこの夫婦の転落は防ぎようがない。そういう意味でマクベスの不幸は我々自身の悪夢なのである。400年にも亘って、この作品が人々の心を捉えて放さないのは、いかなる時代の人々をも一瞬にして凶々しい悪夢につき落とす力があるからである。以上のようにこの作品中に描かれる不幸には大別して三つのタイプがある。コーダーの領主の場合のように、不幸が招く不幸。ダンカン王、パンクォー、マクベス夫人の場合のように人間の長所に潜在する不幸。マクベスの場合のように組み合わせられる相手によって不運にも掘り起こされる不幸である。コーダーの領主を除けばいずれの不幸も「Fais is foul.」「良いは悪い。」という魔女の言葉と符号している点が見事で興味深い。シェイクスピアは不幸の本質を魔女以上に熟知しているのである。

註

テキストはアーデンシェイクスピアの「マクベ

「マクベス」に見る不幸の諸相

ス」を使用。本文の引用はすべてこの版からであり、幕、場数は引用に続けて括弧に入れて示す。

SUMMARY

The Variety of Unhappiness in *Macbeth*

Osame Matsuda

Macbeth is well-known as a tragedy, because it is so clear that unhappiness is its main theme. In this paper I intend to analyze

the unhappiness presented in *Macbeth* and get a clue to know the image of unhappiness of Shakespeare. And if I have a chance, I like to try the same kind of analysis on the other works of Shakespeare. It may serve to know the way to change our modern world, which is full of unhappiness and despair more than ever.